Osaka Shoin Women's University Repository

「生れ出づる悩み」への一視点

― 有島武郎の異常性の側面から ―

福本　彰

「生れ出づる悩み」は、まともに論じられることが少ない有島武郎の代表作品の一つである。モデル問題については、既に山田昭夫氏のすぐれた報告がある。(1) しかし、作品論としては、解説的なものはあっても、研究論文として突っ込んだ個性的なものは見当らない。作品が未完成品の未熟な駄作故にか、というとそうでもない。むしろ、事情は逆なのである。有島の作品としては珍らしく完成品なのである。紅野敏郎氏が「この作品の構成は、文字通り、古典的な起承転結の骨法をみごとにふんでいる。」（『鑑賞と研究現代日本文学講座小説4』三省堂）と言われ、さらに「起承転結の骨法をふんでいても、それは作為的になされたのではなく、この物語のもっとも自然な展開が、おのずと巧まずして起承転結の構えとなっていったように思われる。」（傍点筆者）と指摘される如くなのである。

ぎくしゃくとした展開の仕方を前半に取りつつ、後半に至って、不自然なまでに急ぎ足の衝迫的な文体を駆使して、まとまりを付けてしまう、有島文芸の世界の中にあって、「生れ出づる悩み」は、割に（同パターンを踏みつつも）〈作為〉が感じられないで、〈自然〉にその熱演調に乗って行かれる作品なのである。有島の作品の中で、もっとも破綻の少ない作品であると言っても過言ではない。しかも、有島的問題を充分に内包し展開されているのである。

こう述べてくると、従来の有島文芸の研究方法に対して、疑問なり、不満なりをぶっつけているように思われるかも知れないが、自己反省を含む形で、確かにそれを一面において認めざるを得ない。しかし、同時に、私自身最近まで、この作品を神棚に祭りあげるような恰好で、論じる気持ちにならなかったのは何故かと考えてみると、従来のこの作品の取り扱い方も、或る意味で、当然のような気もするのである。と言うのは、この作品に書かれた問題や苦悩が、余りにも典型的で透明過ぎるからである。有島武郎の世界を、少しでもかじった人なら、誰でも気付くような問題や苦悩が、有島的な誠実さで典型的な形を取り、呈示されているからである。乃ち、芸術と実生活の苦悩・相剋、田舎と都会、自然と〈よき魂〉に対する共感原理による奪取的在りよう、白樺的特質性と社会性の配慮等々の苦悩や問題の在り方が、誠実に熱演調で語られて居り、しかも、適

Osaka Shoin Women's University Repository

切な作品の広告文まで、作者有島武郎は書き残しているのである。

私は「生れ出づる悩み」に於て、凡て誕生を待つよき魂に対する謙遜な讃歌を唱へやうとした。自然は大きな産褥だ。私はその産褥の一隅につつましく坐つて、華やかな誕生を祝する歌手でありたい。

この一文を、作品に即して具体性を持たせ論じるなら、山田昭夫氏の、次のような行き届いた見解になるのではないだろうか。

文学者たる以上は〈人類の意志と取組む覚悟をしなければならない〉のに、自分が文学者であることを疑わずにおられぬ精神の危機を凝視する有島にとって〈仁王のやうな逞ましい〉肉体に〈少女のやうに敏感な魂〉を所有している金次郎は、まさしく自分の文学的理念を体現する青年であった。獣の如き無垢な野性と少女の如き敏感さの同時存在、有島の文学的化身欲を分析すれば、結局そのような人間像が導き出されてくるのである。金次郎をかくあらしめたものは〈自然〉であった。その〈自然〉の恩恵を〈奪ふ〉べく、有島は金次郎の生活の中に深く潜入して行く。(『有島武郎』明治書院)

これでは私の出る幕などないありさまで、神棚深くしまい込んで、避けて通ってきた事も無理からぬと言うべきか。

ところが、最近少し気になって来たのである。と言っても、全体的に論じる視点を得たわけではない。唯、少し気になった箇所があったというだけである。初出稿(『大阪毎日新聞』夕刊の方のコピー)と比べながら、作品を読み終えた時、その「叙述のダイナミックな連弾につぐ連弾」(山田昭夫、前掲書)に圧倒されて、中距離を全速力で走ったような不思議な疲労と興奮を覚えたが、同時に一箇所だけ妙に頭にひっかかった。次の箇所である。

君の心は妙にしんと底冷えがしたやうに棘々しく澄み切つて、君の眼に映る外界の姿は突然全く表情を失つてしまつて、固い冷たい、無慈悲な物の積み重なりに過ぎなかつた。無際限な唯一つの荒廃—その中に君だけが呼吸を続けてゐる、それが堪らぬ程淋しく恐ろしい事に思ひなされる荒廃が君の上下四方に拡がつてゐる。波の音も星の瞬きも、夢の中の出来事のやうに、君の知覚の遠い〳〵末梢に、感ぜられるともなく感ぜられるばかりだつた。凡ての現象がてん〴〵ばら〳〵に互の連絡なく散らばつてしまつた。その中で君の心だけが張りつめて死の方へとじり〳〵深まつて行かうとした。重錘をかけて深い井戸に投げ込まれた燈明のやうに、深みに行く程、君の心は光を増しながら、感じを強めながら、最後には死といふその冷たい水の表面に消えてしまはうとしてゐるのだ。(傍点原文のまま)

〈私〉の〈君〉への「同感」による想像力は、さらに続き、〈君〉を知らぬまに「そろ〳〵と山鼻の方へ」歩ませ、「唯一飛びだ、それで煩悶も疑惑も綺麗さつぱり帳消しになるのだ。」というような死の誘惑を〈君〉の心中に〈私〉が抱かせるのである。「不思議な痺れはどん〳〵深まつて行く。波の音なども少しづゝかすかになつて、耳に這入つたり這らなかつたりする。君の心はたゞ一途に、眠り足りない人が思はず瞼をふさぐやうに、崖の底を目がけてまろ

Osaka Shoin Women's University Repository

び落ちやうとする。危い……危い……他人事のやうに思ひながら、君の心は君の肉体を崖の際から真逆様に突き落さうとする。」（傍点原文のまま）作品はこの後、汽笛の鋭い音響によって、〈君〉は我に返り本能的な死の恐怖にかられて、〈正気〉に戻るが、すぐに又〈自然〉は、「いつの間にか元通りな崩壊したやうな淋しい表情に満たされて涯もなく君の周囲に拡がり」、そして、それを〈君〉は感じ入り、「ひたと底のない寂寥の念」に襲われて、「熱い涙」と共にその世界に沈潜して行くことを、〈私〉は想像するのである。

此処に言う〈自然〉とは何であろうか。高らかに投げかけられていた、「自然は大きな産褥だ。」という作者自筆広告文の〈自然〉ではないのではないか。この作品が気になりだしたのは、この異質な〈自然〉の意味を考えるようになってからである。問題の端緒である。そこで他の評者は、上記の箇所をどう考えているのかが気になり出して、手元にあるものを調べてみたが、どうも余り反応がない。唯、少し反応して、武井静夫氏が次のような説明をされている。

ふと自殺を思いたった彼は、自分でもわからぬうちに崖の上に立っている。海産物製造会社の汽笛が、そんな彼をわれにかえらせる。／「死にはしないぞ」をくりかえしながら、超人的とも思える意志と肉体との力で、絶対絶命の危機をのりこえたはずの当人が、さびしく孤独のなかで、自らの生きる方向も見出せぬままに、自殺をはかろうとする―そこに矛盾した「木本」の像が、対比されている。／それは「仁王のやうな逞ましい」肉体と、「少女のやうに敏感な魂」とをもったこの主人公の、背負ねばならなかった業でもあった。と同時に、「人類の意志と取組む覚悟」で原稿紙に向かいながら、「始終自分の力量に疑ひ」をいだきつづけていた、作者有島武郎の心の姿であったともいえた。そこでは「木本」と「私」とはいりくんでしまう。（傍点筆者、『有島武郎研究』右文書院刊所収）

恐らく、氏は深い考えがあって指摘されたのではないだろう。しかし、傍点を付した部分の悩みは、どの時期の作者有島武郎の〈心の姿〉をさしているのであろうか。さらに、私のひっかかった箇所は、自分の力量への疑いという煩悶から生起した〈心の姿〉の形象化といった程度のものであろうか。前後者不可分の疑問であるが、例えば前者の時期を素直に考えると、その〈心の姿〉は持続されていたもので、作品から推論すると、〈私〉の〈君〉への「同感」による想像力を駆使していた時期ということになる。作品世界を現実世界へ還元すれば、作品執筆開始期になるし、箇所執筆期とすると、中断後の再執筆期になる。いづれにしても大正七年の〈心の姿〉ということになる。但し、持続されていた〈心の姿〉でもあるが。

私は敢えて作品世界を現実世界に置換する邪道を行なっているわけであるが、理由がないわけではない。と言うのは、あの箇所を私は、充分対象化されて虚構表現された〈私〉でも〈君〉でもない、まさに作者有島武郎の〈心の姿〉のあらわな表出と解釈せざるを得ないからである。従って、私は武井氏の如く混同しているわけではない。もっとも、この作品は〈混同〉や〈邪道〉を許容する面も持

Osaka Shoin Women's University Repository

っているのであるが。

それにしても、あのひっかゝった箇所は、自己の仕事や力量に対する懐疑や不安の心的状態を表現したものなのであろうか。さらに言うなら、あの箇所は武井氏が説明している程度の単なる自殺心理の描写なのであろうか。もっと突きつめて言うと、あの異常な〈自然〉は、自殺の想念にかられる人間に映る自然一般なのであろうか。質的にではないが、どれも私は違うのではないかと思うのである。

あの描出箇所は、単なる「文学者」一般の想像力による所産ではなく、かつて経験していなければならない作者有島武郎の〈抑うつ〉期における、「離人症」状様の体験と希死念慮に陥った時の心的風景を、彼なりに混合して形象したものではないか、と疑って見た方がよいのではないか。

精神医学を学ぶ者にとっての、非常にすぐれた教科書とも言うべき、K・コッレの大著『PSYCHIATRIE』は、（少し不親切な言い方ではあるが）「離人症ないし現実感消失の体験様式は、自身欠乏型の人格が、種々の原因（たとえば、思春期危機とか、抑うつとか）によって、外界との交通 Kommunikation を障害されていることの表現である。」（傍点原文のまま、引用は、塩崎正勝訳『K・コッレの精神医学改訂第五版』文光堂刊より）と述べている。「自身欠乏型の人格」ということも、結果論のような気もするし、「外界」というのも正確な言い方ではないが、今はその詮索は置く。ところで、「自身欠乏者 Selbstunsichehere」とは、K・シュナイダーの類型学に拠った、類型 Typen の一つで、精神科医の間では、敏感者 Sensitive（sensibel〈感受性の強い〉や empfindsam〈感情的〉と同義ではなく、もっと上位の概念であるという）という類型がよくこの概念に置換されるという。K・コッレは言う。「自信欠乏という名称から、たしかに〝敏感〟という概念は切り離すことができない。抑うつ的な生の基調気分が、目立って強ければ強いほど、ますます独自の敏感性 Sensrtevitäät は、意識的に精神加工される（もちろん、一定の知能の高さを前提としている）。独特な不足な感じ、不能 Nichtkönnen の感じ（不全感 Insufficizgefühle）が、その思考・感情・行為の一切を支配する。」（前掲書）さらに、この敏感性素質は、主として三つの性向が認められるという。乃ち、多感 Empfindsamkeit, 邪推 Misstrauen, 嫉妬 Eifersucht がそれである。

クラーゲスの「類型化とは、価値判断に密接に結び付いている」という言葉を考慮に入れての上のことであるが、有島武郎が〈多感〉性向の敏感者であることは問題のないところであろう。武井氏の解釈は多感性敏感者有島武郎の問題までである。その意味でなら、大正七年であろうと、或いは又、いつも意識され持続してきたもの、と解釈されようと問題はない。しかし、「生れ出づる悩み」の上記の描出箇所の問題は、そのようなものではなく、「離人症」状様の体験や希死念慮に陥った、かつての重苦しい「抑うつ」情態の問題と、それへ退行することへの過敏な恐れの一表徴の問題として理解した方がよいのではないか。従って、時期も当然問題となると

Osaka Shoin Women's University Repository

ころである。

かつて、小坂晋氏は、「有島武郎の性格」を〈精神病理学的〉に問題にされ、次のように述べられた。

有島は理由の分からぬ烈しい感情動揺を持ち、殊に憂鬱発作に悩んでいる。この途方もない憂鬱はどう見ても彼の体質に根ざし、彼の生物学的深層から発生しており、その内的な要因に加えて、当時の思想と生活の矛盾が、これに拍車を加えていたものと思われる。彼自身も日記でみた通り、その原因が解せず、結局「性格の矛盾」と考えるのである。

では、この性格の基礎となっている彼の気質はどんなものであったのか。周知の如く、クレッチュメルは正常人を分裂質・躁鬱質に大別し、更にその極端な気質をそれぞれ分裂病質・躁鬱病質として、精神病である分裂病・躁鬱病と対比させた。これによると有島はどうも鬱型の躁鬱質の方に入る気がしてならぬ。(傍点筆者)[2]

有島の気質を、クレッチュメルの説に拠って、「鬱型の躁鬱質」ではないか、と推定されているわけだが、クレッチュメル説を、正木正訳『医学的心理学』(創元社)に、氏が拠っていられる為、現在の時点からみると、用語法が古く、又適切でない。そこで、敢えて私なりに推測・理解して、現在一般に用いられているクレッチュメル説の用語に換言すれば、「鬱型の」とは〈タイプ〉を意味せず、〈抑うつ主導性の〉〈性向〉ということになる。従って、私は小坂氏の「鬱型の躁鬱質」を〈抑うつ主導性の(或いはクレッチュメルの言表を借りるなら、「抑うつ性」)循環気質〉と換言して理解して置きたい。

そこで、この推定自体の問題であるが、何故氏は有島の〈気質〉を、「躁鬱質」(正確には「循環気質」)という、普通人の問題の次元にされたのであろうか。むしろ、E・クレッチュメルが『KÖRPERBAU UND CHARAKTER』で

我々が分裂病質とか循環病質とか呼んでいるのは、分裂性または循環性精神病の心理学的基礎徴候を、割に軽度な人格変性の段階において反映している異常人格のことで、それは病的、健康の間を動揺している。(引用は、相場均訳『体格と性格最新版』文光堂刊より)

と述べているところの「循環病質」とした方が、氏の考えを、より適切に表現できたのではないか。乃ち、〈抑うつ主導性の循環病質〉と言うべきではなかったか。そうでないと、副題を〈精神病理学的考察〉としたり、〈悲しき性(さが)〉云々は、大仰に過ぎる。

ついでに、如上の私の憶説を裏付ける根拠として、精神神経科医である春原千秋氏が、(小坂氏の論のどこにも、有島を〈躁うつ病質〉としている箇所はないのに)

小坂は、武郎をクレッチュメルのいわゆる躁うつ病質の人とし、彼の生涯にうつ期と躁期の交替があるとしているのである。(傍点筆者、引用は、春原千秋、梶谷哲夫共著『現代文学者の病蹟』新宿書房刊より)

と小坂氏の論を理解されたこともあげておきたい。(春原氏の誤読

Osaka Shoin Women's University Repository

とばかり言い切れないものがあろう。）

ところで、〈かつての重苦しい「抑うつ」状態の問題〉に関わろうとして、遠回りしているわけだが、今少し、性格・気質の問題から迫って置きたい。その為には、ここでさらに小坂氏の論の（現時点からみると、適切かつ正確に言表されなかった）意図を汲んで、クレッチュメル説の〈循環病質〉で、有島の気質が捉えられるのかを問題にして置きたい。しかし、この問題は小坂氏自身、「専門家の批判を仰ぎたい」らしいから、先の春原氏の考えを先ず紹介した上で、素人の私の考えを述べて置きたい。（そのことが盲蛇におじぬ妄断となる可能性大としても、人間の精神の問題である限り、文芸研究者として、問題対処には主体的であるべきだと、私は固く信じているからである。専門家の判断も鵜呑みにするわけにはいかないのである。）

小坂氏の論の、参考資料に供する目的をもって、日記、書簡から引用された多くの有島の異常な心的状態の例のみを、恐らく参照した、春原氏は、「鬱型の躁鬱質」という小坂説を、先引した如く「操うつ病質」と解釈された上で、その「気質」の特徴である〈抑うつ〉状態と〈躁〉状態の循環性については否定された。乃ち、小坂氏が躁状態の時期と見られた大正六年前後（いわゆる有島研究者たちの間で言う〈奇蹟の年〉の前後）を「うつ状態から回復した時期と考えた方が自然であろう。」とされたのである。そして、小坂氏が示された二度の抑うつ時期（前の方は「明治三十六年の留学前から少くとも明治四十一年にかけて」で、後は、「或る女」完成以後、小康を得た時もあったが、死ぬまでの落潮期）は、そのまま肯定されたものの、その内実については、次のような見解を示されている。

武郎に抑うつ状態がくりかえし来ていることは疑いない。しかし、その三〇才代までの抑うつ状態は、多分に心因性、ヒステリー性の要素の強いものであり、内因性うつ病と断定するだけの根拠に乏しいように思う。しかし、晩年のうつ状態は、その日記、書簡、創作、そして死に至る彼の行動からみて、内因性うつ病と考えてよいのではなかろうか。（引用は、前掲書）

さらに氏は、先引箇所の小坂氏の論に私が傍点を付した部分を引用された上、その指摘をたたえて「小坂の炯眼に敬意を表したい。」と挨拶を送ったのである。

そこで私の見解だが、有島に〈うつ〉と〈躁〉の循環性を見ない春原氏の考えには、私も首肯したい。このことは、小坂氏の論自体、〈抑うつ〉状態の例証に見合うだけの〈躁〉状態の例証をあげえなかったという事情が、逆証明になっている。明るく快活になった程度を〈躁〉状態と言うのでは、〈精神病理学的考察〉にならないであろうから。従って、春原氏の回復期説は自然な解釈である、と言える。そして、このことは何よりも小坂氏自身が気付いていたことであろう。「鬱型の」などという生半可な言表がそのことを物語っているから。唯、専門家である春原氏は、その生半可性を考慮しなかっただけの話である。

次に、抑うつ状態の時期と、その内実の問題であるが、時期につ

Osaka Shoin Women's University Repository

いては、特に取り立てて言うことはない。（唯、小坂氏が初めの方の抑うつ期の下限を「少くとも明治四十一年にかけて」〈傍点筆者〉と述べていたことは、考慮して置きたい。）そこで、内実の問題だが、春原氏は何故この問題を「内因性うつ病」かどうかということを基準に取り上げられたのであろうか。三十代の方の抑うつ期を、晩年の「内因性」のものと区別して、「心因性、ヒステリー性要素の強いもの」とされたが、その場合の「心因性」の概念は「反応性」を内包しているのだろうか。又、とくに「うつ病」の場合、「その発症に状況的要因の果す役割が大きいことが」近年、見直されてきており、「内因性精神病」といっても、「遺伝と環境とのあざなえる縄の如き関係の中で発生してくる精神病というべき」[3]性質のものらしい。従って、有島のような症状の場合、氏のように区別することに、どの程度の積極的な意味が認められるのか、という問題を含めて、以上のことを、もう少し詳しく、氏によって、再報告されることを願わざるを得ない。（付記）（でないと、専門領域外の分野の書物は、一般読者向けの啓蒙書のみ、一・二冊で済まし、非主体的に対応して事足れりの論文が横行している国文学界の現状では、悪弊だけがもたらされるからである。無批判受け入れの、鵜呑み型、無理解暴露隠ぺいと博識顕示欲との混合による。ちらつかせ奉り型、そして無能力、無勉強のくせに、思想によって問題にしないかのような態度をとる、見せかけポーズ型、等々がそれである。）

抑うつ問題の内実の是非については、春原氏の論自体が、右のような問題点を持っているので留保し、ここで視角をかえて、性格、気質の問題から、私の見解を述べて置きたい。

先述した如く、有島には〈躁〉と〈うつ〉の循環性は見られないので、クレッチュメル説の単純な応用は妥当性を欠くのではないか。体格の問題においても、小坂氏のあげた「ふっくらと円味を帯びた手足・顔の輪郭・色艶のいい皮膚」という田所篤三郎や「円味を帯びた額、均整のとれた容貌」という足助素一らのことばの程度の証言から、「肥満型」とするのは、即断に過ぎる。事実、安本美典氏は、有島の写真、写真の印象を述べた伊藤整の評言、そして教授時代の有島の印象を述べた長田幹彦のことばを証拠に、小坂氏とは逆の「無力型」と見ているのである。[4] どちらも、自説に都合のよい証言だけを引用するというお粗末さである。クレッチュメル説の非主体的な機械的応用は、右のことだけからでも、つつしむべきであることが分かろうというものである。

さすがに、春原氏は単純な理解の仕方をせず、有島の性格を問題にして、

武郎の性格は複雑であり、これを循環気質と簡単にいい切ることはできない。私はむしろ彼の性格はヒステリー性性格を多分に含んでいたものと思う。（引用、前掲書）

と述べている。氏自身、「両親の激情的な血が流れていたこと」と、彼の日記を、本多秋五が「心の動きをいわば内のりにおいて縮小的に書くのではなく、外のりにおいて拡大的に書く性質のものであったが、それにしても揺れ動く心である」と指摘したことを、〈誇張的で、感情変易の激しいもの〉と置換して理解し、それを〈ヒ

Osaka Shoin Women's University Repository

ステリー性格の一つの現れとみる〉といった程度しか、右引用にうかがえる判断の根拠をあげていない。そのことは紙幅の都合上と思われるし、従って、氏にどの程度の有島像の理解が行き届いているのか分らないが、私自身、有島の性格を「ヒステリー性性格を多分に含んでいたもの」というのは、的はずれではないか、と思っている。

（ところで、私自身も与えられた紙幅を失なうという皮肉な巡り合わせになったので、この論を未完とし、機会を得しだい、別に論証することを約束し、以下結論的な形から、問題提起だけをして置きたい。）

なるほど、氏のあげている、激情的、誇張的、感情変易的の特徴だけから見れば、「ヒステリー性格」が、有島の性格理解の〈中核〉として見れないこともない。だが、普通、「ヒステリー性格」という時、虚栄的自慢的、自己中心的、虚言的、多弁的、被暗示的、依存的、熱狂的、偽瞞的といったような傾向も了解されており、K・シュナイデルも、その著『精神病質人格』で「好ましからぬ特徴で、ヒステリー性格にとり入れられてしまっていないものはおそらくないであろう」[5]とさえ述べているのである。彼自身「ヒステリー性格」という言表を嫌い、「自己顕示欲型」の「精神病質」として問題にしている。従って、不誠実さや自己偽瞞性が常につきまとう法螺吹きのエゴイストといった印象は免れないのではないか。それを有島の性格の〈中核〉として見ようとするならば、一般に、〈自己〉に誠実で、又そうあろうとした人有島と理解されている像を、よほどの論証力でもって打ち破らない限り、説得性に欠けるのではないか。的はずれではないか、とした所以である。（無論、氏が、有島の性格を複雑なものとして、「単一な性格類型で表現」できないとしていることは承知している。しかし、「複雑」を強調し過ぎれば、何も言わないことに等しい。私は性格・気質・類型を、根本的には便宜的なものに過ぎないと考えている。だからと言って、ナンセンスなものとは考えない。）

※

（与えられている紙数が尽きたので、最後に、箇条書き的に、私自身、有島の性格をどう見ているのかを述べ、それとの抑うつ問題の関係性に触れた上で、「生れ出ずる悩み」への一視点としての問題とそれらがどう関わるかといった事を、列挙して置く。従って、「論証」は、別の機会に譲ることを許して頂きたい。）

一、有島の性格の中核は、下田光造氏が言われたところの「執着性格」と考えるのが、最も適切と思っていること。（多感性敏感者有島と矛盾するものでないと考える。）

一、有島の抑うつ問題の内実を、周期性うつ病と見、三〇代のものを初期段階と見、晩年のものをそれより少し進行したものと見ていること。それ故最深期までは進行しなかったと解釈していること。

一、「執着性格」とうつ病の関係の問題は、テレンバッハのいう病前性格との酷似から注目されていることは、周知のことであること。

Osaka Shoin Women's University Repository

一、当面の問題となる初めの抑うつ期は、単なる「反応性」のものとは解釈しないが、ある程度までは、状況との関連で了解可能と考えていること。

一、右の抑うつ体験で有島が最も重大な問題意識を抱かざるを得なかったのは、生命感情喪失の危機感であったこと。

一、そして、有島の思想性や文芸作品の問題の根底には、右の問題が常につきまとっているということ。

一、「生れ出づる悩み」の世界も、その例外でないこと。

以上が私のおおまかな見取図である。

註

(1) 山田昭夫著『木田金次郎』（HTBまめほん⑬、昭和47年6月5日発行）、のち、同氏の著『有島武郎・姿勢と軌跡』（右文書院、昭和48年9月25日発行）に収録された。

(2) 小坂晋「有島武郎の性格―精神病理学的考察―」（『国語と国文学』昭和37年2月）

(3) 引用は、『精神医学事典』（弘文堂、昭和50年12月15日発行）の笠原嘉氏担当の「内因性精神病」の項目から。なお、本論を書くにあたって参照した精神医学の概論書は、笠松章著『臨床精神医学』（中外医学社、一九五九）、三浦岱栄・塩崎正勝共著『現代精神医学』（文光堂、一九六一）、諏訪望著『最新精神医学』（南江堂、一九六一）、新福尚武著『新精神医学（増補6版）』（医学出版社、一九六三）、西九四方著『精神医学入門（増補13版）』（南山堂、一九六五）、村上仁・他著『精神医学』（医学書院、一九六七）である。他に各論として、躁うつ病関係は専門書、一般啓蒙書を問わず参照。分裂病、神経症、性格学、自殺論、ヒステリー、異常心理、天才論等の関係は、今回は、それぞれ数冊程度しか目を通さなかった。続稿ではもう少し勉強したいと考えている。

(4) 安本美典著『創作の秘密』（誠信書房、昭和38年6月10日発行）

(5) クルト・シュナイデル『精神病質人格』懸田克躬・鰭崎轍訳（みすず書房、一九五四年八月三十日発行）

（未完）

付記 春原千秋・梶谷哲男共著『精神医学から見た作家と作品』（牧野出版、一九七八年七月二十日初版発行）の〈あとがき〉によると（恐らく春原氏の執筆によってであろうと思うが）「月刊ペン」誌上に〈有島武郎〉を取り上げられたことが記されている。（このことは九月十日に知る）現在（九月十三日の時点で、今本稿の再校中である）でも筆者未見の状態であるが、続稿においてはなんとか入手の上、検討することを約束し、今は見落したことを、特に春原氏にお詫びしておきます。

尚、本稿の脱稿は、本年五月二十二日で、二十四日には私の手元を離れた。

（本学講師）